父明智光秀、波乱の生涯

来年度

# 大河決定

「麒麟がくる」

戦国時代
ひとりの少女が
長岡京に嫁いだ。
波乱万丈の行列は
そこから始まる。

# 文武両道。戦国の姫ガラシャ

天正六年(一五七八)、明智光秀の娘、玉は細川忠興に輿入れする。そのわずか四年後、父光秀は主君信長を本能寺に討ち、天下の謀反人の烙印を押され、秀吉たちの軍勢に倒されることとなる。

下剋上は、戦国時代の習い、数多くの主君や身内での闘争が繰り返されていた世の中のことである。玉とて、武士の娘、我が身がいつそうなるかは、婚儀の時に想像、覚悟はできていたはずである。夫、忠興との逸話に、夫が不手際をした部下を自ら手にかけた際、興奮やまぬであったのか、血がべっとりとついた刀を、玉の着物の袖で拭ってしまった。顔色変えずにいた玉はその後数日に渡りその着物を着替えようとはせず、夫の前に出ていたというのである。

胆の座りようが違う。現代から見ると遥か遠い昔のこと、また境遇も現代人の我々とは違い、常に身を危ぶまれる中で育った武家の娘である。もちろん当時の武家階級のこと、書や歌など教養はすでに嫁ぐ前から身につけていたであろう。それに劣らず、武家の娘として武の心得もあったのであろう。文武両道の精神的な支柱はその後、豊臣政権との政治的な関係から夫忠興が否応なく牢へつないだ時も、また、家康に付き従い、夫が上杉征伐へでかけた際に、残る石田三成が人質に取ろうとした時も、きっぱりとした態度と覚悟で自己の想いを貫いた女性である。

やはり光秀の娘であると思う。こうと思うと曲げることはできない苦しい生き方を選んだのかもしれない。ただ唯一、彼女の救いは、この長岡京で夫忠興と子どもたちと睦まじく過ごした数年と、侍女のススメで入信したキリスト教であったことであろう。

辞世の句が残っているが
そこから読み取れるのは
やはり武士の娘としての
潔さ、覚悟というものだ。
「散りぬべき 時知りてこそ
世の中の 花も花なれ 人も人なれ」